

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17530363  
 研究課題名（和文） 野外教育現場の生徒間コミュニケーションに表出する共同体意識の観察と分析  
 研究課題名（英文） On the Sense of Community Represented in the Conversation among Participants in Outdoor Educational activities  
 研究代表者  
 森 祐司（MORI YUJI）  
 大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
 研究者番号：80182210

## 研究成果の概要：

本研究では、野外教育現場におけるコミュニケーションの観察・分析およびアウトドアライティングなどの文献調査を通して、アウトドア教育現場においては、共同体意識と「遊び心」「楽しみ」という感情が重要な働きを持っていることを解明した。また、インタビュー、行動を共有することによる「参与的」研究方法についての文献調査と実地調査を行い、人間の意識についての定量化（数値化や図式化）に頼らない質的な（記述や物語による）研究の可能性を示した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,700,000	0	1,700,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,600,000	420,000	4,020,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：共同体、コミュニティー、コミュニケーション、民族誌、エスノグラフィー、アウトドア、野外教育

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、社会学および文化人類学等の分野では、すでに、地域社会、学校、職場等における「共同体」の形成メカニズムや構造に関する研究がすすんでいたが、このような制度、システムに関わる研究を補完する意味で、社会構造内で作用する個人個人の人間主体のコミュニケーションを中心に共同体形成のメカニズムを探ろうとする本研究に

は独創性があると考えた。

また、当時から、社会構造を解明するための手法として共同体概念を用い、人間の複合的コミュニケーションが共同体形成に作用するメカニズムを研究する国際的な潮流が見られ、また、E. ゴフマンの影響を受けた J. J. ガンバーズ、D. タネンを中心とした談話分析的手法を用いた社会言語学研究においては、日常的コミュニケーションのメカニズ

ムの分析を通して人種、ジェンダー、階級といった社会構成に表出するコミュニケーションギャブの研究が進んでいた。本研究の特色は、これらの研究においても未開発であった「アウトドア」の空間でのコミュニケーションの形態を研究対象とする点であった。いわゆる「遊びの空間」は、人間のコミュニケーションが日常の制約から解放されることにより日常と非日常との境界において発動される空間であるゆえに、最も注目されるべき対象だと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、近年の社会学、社会コミュニケーション論、社会言語学、及び共同体形成論の成果を踏まえ、インフォーマントとの直接的接触に基づく現地調査を通して、野外活動(Outdoor Activities)(アウトドア・スクール、環境教育の現場)において交わされる言語的・非言語的コミュニケーションを観察・分析することにより、そこに表出する「共同体意識」を解明することを目的とした。

本研究が対象とするアウトドア・スクールや環境教育の場は、今日「人間教育」を行う場所としての重要性が特に注目されており、心理学、教育学の分野で進められている研究は適正なカリキュラム作成や指導者育成に具体的な成果が上げてきている。

したがって、本研究は、むしろそれらのスクールに集う生徒間のコミュニケーションを分析対象とすることで、教育成果としては具体化・数値化することが困難であった社会的コミュニケーションが生む共同体形成に及ぼす効果を明示的に示すことを目的とした。また、この研究は、学際的研究である社会学の分野での社会的コミュニケーション研究に貢献するものだと考えた。

以下、本研究の目的をこの分野での研究の進展に照らしつつ、2つに絞って述べてみたい。

### (1) 共同体理論の修正と研究対象の拡大

近年注目されている新しい共同体理論に、S. ホール、P. ギルロイ等のいわゆるカルチュラル・スタディーズの理論により発展した「生成する共同体」という概念がある。本研究は、T・ヴェブレンの古典的業績からD・マッカネルを経て今日に至るいわゆる「有閑(余暇)階級」の理論的研究に対して、人種・ジェンダー・階級といった旧来の社会構成上のカテゴリーを越えた人間集団の存在形態を特定することにより、今日的な「有閑階級」の現実に基づいた理論へと修正を行うことを目的とする。さらに、「日常性」と「非日常性」との境界領域をなす野外活動の場における実際のコミュニケーションを観察・分析

することで、これまでの社会言語学、社会コミュニケーション論が中心に扱ってきた対象領域の拡大を図る。

### (2) 「余暇研究」への貢献

野外活動を対象とした研究は2つの大きな領域において近年目覚しく発展してきている。ひとつは、社会学の分野を中心に「余暇(レジャー)」「観光」といった範疇においてそれを捉え、いわゆる非日常の活動の人間社会に及ぼす影響を解明するものである。その成果は、近代における社会構造の変容の様態をあきらかにし、特に後期資本主義経済における人間と労働の複雑な関係を探る上に大きく貢献している。もうひとつは、1990年代以降深刻化してきている環境問題との関連において、人文・社会科学の各分野において高まってきた環境教育との関連において野外活動を捉えようとするものである。社会学においてもすでに「環境社会学」は一分野として確立している。本研究は、人間の社会生活における「移動」、及び「環境」に焦点を当てることにより、野外活動の場でのコミュニケーションの実態を明らかにし、経済、文化のグローバリゼーションの進捗中、人間の余暇の過ごし方がいかにその社会生活に影響を与えているかを解明する。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するための基本的研究方針は、(1) 理論研究のための文献等の資料収集・分析 (2) 野外活動の調査・研究のためのフィールドワークに大別される。

### (1) 文献資料の収集と分析

文献資料に関しては、①フィールドワーク調査およびその成果発表の形式としてのエスノグラフィー研究に関する文献 ②野外教育に関する理論的文献 ③アメリカのアウトドアライティングを中心としたアウトドア活動に関する小説、物語、エッセー等の文献にわけて収集、分析した。

### (2) 野外活動の調査・研究のためのフィールドワーク

フィールドワークにおける調査者(観察者)のスタンスの問題は、観察主体の立場(客観性)と参与主体(主観性)の立場との間で様々に議論されているが、本研究においては、特定の立場を取ることを避け、主観⇄客観の間を比較的自由に往来するスタンスをとった。すなわち、大学教育の一環としての野外教育授業の場合では、基本的に「観察者」の立場をとり、ビデオテープ、カメラ等の使用の許可を得て「授業参観」の形態を取ったり、別の機会では、学生グループに参加すること

によりともに活動を共有しながら観察を続ける「参与観察」を行った。活動後「フリートーク」によるインタビューを行った。

本研究の研究対象は、① 公的学校教育の学生 ② 野外活動の教室に参加する生徒（大人および子供） ③ 趣味として野外活動をする人々に分類されるが、それぞれの「場」を中心としたカテゴリー化の試みとして、① 組織的アウトドア教育現場（大学における野外教育の授業等） ② 小グループの教育現場（クライミングスクール、スキースクール等） ③ 非組織的教育現場（個人登山者間のアドバイス等）という3つのグループに分けて調査結果を分析する方法をとった。

#### 4. 研究成果

まずは年度別の特筆すべき成果についてまとめる。

##### (1) 2005年度

主に分析対象の予備調査と参与観察によるデータベース作成の準備を行なうとともに、フィールドワークやエスノメソドロジーに関する文献調査を行い、その成果を踏まえ2006年度の大学院授業で「フィールドワーク入門」を開講し、言語文化研究の授業でフィールドワーク実習を始めて取り入れた。

##### (2) 2006年度

「アウトドアの教育現場」をいわゆるアウトドア・スクールに限定せず、山岳会の新人研修や、さらには、山小屋などで「偶然」出会った登山者同士の会話などに表れる「教育的」言説等にも着目し、このような「出会いの場」も広い意味での「教育現場」と捉える視点を導入した。

##### (3) 2007年度

新たな調査対象として、視覚障害者を対象とするクライミングスクールを取り上げた。

視覚障害者と晴眼者との間のコミュニケーションや共同体意識を考察する際、言語使用がいかにかに既成概念による制限を受けているかが浮き彫りになった。特に身体的活動が中心となるアウトドア現場において、視覚が制限されている「仲間」との間で交わされる言語コミュニケーションの困難については、今後さらに観察する必要がある。

##### (4) 2008年度

水害に見舞われた山小屋の災害復興ボランティア活動に参加し、各種山岳会、個人登山者が協力し合いながら作業する現場に参加し、非常事態における共同体意識の発現の諸相についての体験的観察を行った。「かかわり」「思い入れ」といった感情と非常時の作業の指導、習得（広い意味での教育）が仲間意識に及ぼす諸相を観察した。

次に、研究テーマ別の成果について述べる。

##### (1) フィールドワーク、エスノグラフィーに関する研究

文化人類学において、マリノフスキーに代表される従来のエスノグラフィーの在り方を批判的に解消しようとしたクリフォードとマーカスの『文化を書く』では、いかに公平無私な視点で観察した事実を客観的に描写する姿勢を標榜しようとも、エスノグラフィーの著者（author）が思わず知らず発揮してしまう「権威」（authority）を問題視している。

この西欧文化の持つ相対的な優位性や学問の持つ必然的な権力の問題については、社会学においてもジョン・ヴァン＝マーネンが『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法—』で、機能的、構造的、唯物論的、認識論的、言語学的理論にあると考えられてきた明晰性は否定されたと宣言している。

本研究の代表者（森）は、これらの文献調査と本研究のフィールドワーク実践を踏まえて「創作としてのエスノグラフィ」においてエスノグラフィーの創作性についての可能性を示唆した。

##### (2) 「冒険」とアウトドア活動

本研究代表者（森）のアメリカの環境思想についての先行研究から浮かび上がるアメリカの「冒険」の概念と、実際のアウトドア活動や教育における「冒険的要素」（ロッククライミング、雪上訓練等）の観察から、今日的「冒険」の概念が、最終的には理論上100パーセント安全であることを前提とした「冒険」に変容していること、しかし、それによりさまざまな「スタイル」を求めるアウトドア活動の多様性が生まれているというのが今日のアウトドア活動の「冒険」の特徴であることを指摘した。（「野外教育と冒険—アメリカの「冒険」の概念再考—」）

##### (3) 「遊び」「楽しみ」と仲間意識（共同体意識）

インストラクターと参加者（生徒）、さらには、個人的つながりの強い山岳会や山小屋の常連との間の個人的コミュニケーションを考えるに際しパブリック/プライベートという視座を導入することで、共同体意識の形成に「遊び」「楽しみ」といった個人的な情緒、感情に係わる要素が密接にかかわっていることがわかった。これは、ホイジンガ（『ホモ・ルーデンス』）、カイヨワ（『遊びと人間』）に代表される「遊びの精神」についての文化的研究の流れに位置づけられるチクセントミハイの「フロー理論」が、このような小グループによる教育現場や非組織的な教育現場（個人個人の登山者間の会話に垣間見られる教育的要素）の教育効果や共同体形成に有効であることを示している。アメリカのアウトドアライティングの文献的事例と比較す

ることにより、「野外遊びと日常一楽しみの言語文化とアウトドアライティング」において、このような広い意味での「教育」で「遊び」（楽しみ）の概念にもとづく共同体形成が「日常」と融合するプロセスについて考察した。

さて、上記のように、本研究は、社会学および文化人類学における中心テーマである「共同体」について、アウトドア活動や野外教育の分野の対象を用い考察した点で、国内における関連分野を横断した研究となっている。

現在、科学研究費による助成が終了した時点で、登山者やクライマーの広範的な「意識」についての研究を継続的に続けている段階で、いわゆるロッククライミングや登山などのアウトドア活動における「意識の研究」が、欧米において萌芽的に進められている事実を指摘したい。そのひとつの例として、2008年イギリスの社会学者ヴィクトリア・ロビンソンの *Everyday Masculinities and Extreme Sport: Male Identity and Rock Climbing*（日常の「男らしさ」とエクストリーム・スポーツ—男性アイデンティティとロッククライミング）が上掲されたことを挙げておきたい。これは、男性がロッククライミングという活動を通じてどのように「男らしさ」を自己アイデンティティの意識形成に結びつけるかというプロセスをフィールドワークによる参与観察およびインタビューの手法を用いて解明した類をみない研究である。

本研究が、このような社会科学における潮流にそったものであることを再確認し、今後さらに、社会学とコミュニケーションを視野に入れた隣接分野の発展に貢献するものとなるよう努めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 森 祐司、「創作としてのエスノグラフィ」、『アメリカ文化研究の可能性 VI』（言語文化共同研究プロジェクト 2007）、査読無、2008、21-28

② 森 祐司、「野外遊びと日常一楽しみの言語文化とアウトドアライティング」、『アメリカ文化研究の可能性 V』（言語文化共同研究プロジェクト 2006）、査読無、2007、21-30

③ 森 祐司、「野外教育と冒険—アメリカ的「冒険」の概念再考—」『アメリカ文化研究の可能性 IV』（言語文化共同研究プロジェクト

2005）、査読無、2006、31-40

〔学会発表〕（計1件）

① 森 祐司、「アウトドアライティングと言語文化研究—環境から現場（フィールド）へ」、日本アメリカ文学会関西支部7月例会、2007年7月14日、大阪外国語大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 祐司 (MORI YUJI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：80182210

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者